

恐れの中に平和

先週、わたしたちは主の復活を祝うイースターをともに迎え、御言葉をとおして最初の朝に起きた出来事に聴きました。それは死が敗北した出来事、死がすべての終わりではなくなり、キリストが死の先にある新しい命の道を指し示した出来事でした。それはイエスを救い主とする信仰を実体化し、世にキリスト教と呼ばれる宗教を誕生させる直接のきっかけとなりました。少し変わった言い方をしました。たしかに外側の人から分類されるならキリスト教で間違いはないのですが、わたしの感覚ではイエスを救い主として信じて、そのお言葉によって人格と人生と共同体を形作る群れ、すなわちイエスを頭とする教会という、主に召し集められた群れに加えられて生かされている。そういう確かな実体を伴った群れの一員とされている感覚です。主イエスは「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩篇に書いてある事柄は、必ずすべて実現する」と語っておられます。この神の言葉によって、わたしたちは自分と自分を取り巻く世界を理解する。そこに希望をおいて生きる。毎週の礼拝は、死に勝たれた主の復活を祝う小さなイースター礼拝だと先週申し上げたと思います。日曜の朝、わたしたちがこの会堂に集まるのは、この驚くべき消息を分かち合って喜び、そこから慰めと励ましを得て、ここからはじまる週のおとずれに派遣されて働くためです。ユダヤ教では土曜日が安息日でしたが、わたしたちにとってはキリストが死者の中から復活され、聖書の言葉の正しさと神の赦しの愛を明らかにされたこの日曜が真実の安息の日となったのです。

しかし、この神の真実が受け止められ、喜びにかわり、新しい生き方が形作られてゆく過程はそう簡単なものではありません

んでした。福音書は、きわめて率直にその事実にくれています。一番最初に書かれた福音書であるマルコはあの日の朝、墓に向いた婦人たちが空の墓を発見し、ひどく驚き、墓の中にいた白い衣を来た使いから、ことの顛末を聞かされますが、墓を出て逃げ去り、震え上がり、正気を失っていた。そして、誰にも何も言わなかった。恐ろしかったからである、と記しています。

この恐ろしさというのは、自分の理解をこえた出来事に直面したときの本能による怯えですね。人間はほかの動物と違って理性を与えられています。考える力です。しかし、理性に合わないし、理屈にも合わない。人間の経験してきたことに反する神の業そのものに直面させられたのですから、これは無理もありません。しかし、婦人たちや弟子たちになんの導きの糸も与えられていなかったかということそんなことはなかったのです。あの現場で白い衣を来た者が語ったように、この十字架の死と復活の出来事はすべて主イエスがガリラヤにおられたときから、必ずそのようになるとつねに言い聞かせておいたことでした。御言葉はいつもわたしたちの現実に先んじて与えられているのです。必ず備えられている。しかし、弟子たちも、婦人たちもその教えを忘れていました。事柄が、我が身に降りかかるまでは御言葉の真実がわたしの存在を捉えることはないのだと思い知らされます。わたしたちの苦難の体験こそが御言葉が真実であることを受け入れるための、つまり救われるためのただ一つの道なのです。そして、そうしたわたしどもが体験する苦難のなかで最大のものが死であることは間違いありません。イエス様の弟子や婦人たちのすべての思いを死という理不尽な現実が上書きしてしまい、そのようなお言葉があったことなど思い出せなかったと言うのが正確でしょう。よほど時がたって機会があれば、そういうお話を伺ったこともあったと思い起こすこと

もあったかもしれない。しかし、まだ三日目、わたしたちだっ
て親しい者が亡くなったとき、葬儀を三日の間に終わられれば
早い方ではないでしょうか。2月だったでしょうか、東京の牧
師と話す機会があって、その時、いま火葬場待ちが1週間以上
だと聞いて驚いたものです。ようするに何が言いたいかとい
ますと、当事者となった者たち、弟子たちやイエスの近くに
いた婦人たちにとっては死の恐るべき力に捕らえられて、自分
の中に蓄えたはずの主のお言葉は見えなくなっていた。次は自分
たちに手が回るのではないかと恐れ、なんとかせねばと気ばかり
あせる。しかし土曜日は安息日ですから動くに動けない。また
婦人たちはイエスの埋葬をきちんと行いたいとじりじりして
いたでしょう。恐れがあり、悲しみがあり、大きな失望もあ
った。死がすべてを終わらせ、彼らを驚掴みにしていた。ひとつ
提案をしたいのです。こういう体験はわたしたちすべての者が
共通に体験する出来事です。その時、礼拝に出てほしい。この
とき婦人たちが白い衣を着た神の使いから、キリストの言葉を
思い起こしなさいと言われたように、当事者となってしまった
わたしたちは自分の中から救いにたどり着くことは出来ない。
わたしの外から、御言葉を手渡してもらわなければならない。
キリストの約束の言葉はなんであったか、それを思い起こしな
さいと、自分の外から、その御言葉を語ってもらわなければな
らない。すべてはそこからです。婦人たちも、弟子たちもお言
葉を聴き、思い起こし、そこにすがって次の一歩を踏み出した
のです。そこに神の出会いの出来事が起こされる。聖霊が働き、
復活の主があらわれる。それは今日的にいうならば、わたした
ちが御言葉を通して、心が燃える体験をし、たしかに主は生き
ておられるという、臨在の体験をすることであろうと思います。
そのさまをルカは次のように記しています。

次の火の粉は自分たちに降りかかる。そう考えて、主だった弟子たちはみな雲隠れした。狩られる恐怖、エルサレムからどう脱出して故郷にたどり着くか、足の早い者たちはいち早くエルサレムを離れたわけですが、そのうちのふたりに復活の主が現れたことをルカは記します。それがエマオのキリストとして知られる有名な出来事です。すべてが慌ただしく動いています。安息日の土曜を迎えていましたので表立った活動は出来なくても、頭の中は高速回転して、これからのことをあれこれ考えたでしょう。集まった仲間同士で今後のことを話し合いもしたでしょう。しゅんしゅんと沸騰する薬罐のなかのお湯のような状態で日曜の朝を迎えたのです。

わたしは先週、婦人たちが墓に向いて空の墓の前で途方に暮れたという箇所の説き明かしをいたしました。あれは本当にうまい表現だと思いました。途方に暮れる。道がない、手段がないという意味のギリシア語でした。墓までくればジエンド、もうこの先の道はない。死がすべてを終わらせた。しかしそこが空であり、イエスの遺体がなかったという現実はありません。ことであり、理性も理屈もこれを説明出来なかった。今後、そういうかたちでの証明は出て来ないし、意味もない。恐れと失意の中にあつた彼らを奮い立たせたのは何だったか。それはイエス様ご自身が、ああ、物わかりが悪く、心が鈍く、預言者たちのいったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないかと仰られて御言葉を解き明かされたこと、食卓をともにし、賛美の祈りを唱え、パンを割かれたとき、弟子たちはあの食卓を思い起こした。最後の晩餐の時にいわれたあのお言葉、これはあなたがたのために割かれるわたしの体である。御言葉と聖餐、それが今日でもわたしたちに主が生きておられることを示すの

です。ふたりの弟子はただちにエルサレムに引き返すと、復活の主はすでにシモン・ペテロのもとにも現れておられ、11人の弟子と仲間たちはそのことについて、分かち合いをしていたところでした。このただ中に、キリストが出現されます。他の福音書だと、この部屋にはユダヤ人を恐れて鍵がかけられていたというのですが、復活のイエスは彼らの真ん中に立たれ、「あなたがたに平和があるように」と言われたのです。この言葉は、イエスさまがお生まれになった時に、天使が空に現れ、「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」と賛美したことの實現だと思わされました。キリストが恐れに囚われた者たちのなかに、ご自身をまったき平和の与え手として投げ込まれた。ちょっとおかしな表現ですが、恐れの中に、死に勝たれた方として、ご自身を現された。弟子たちは亡霊を見たと思った。これは当然でしょう。そこでイエス様は手足を見せて、触ってみなさいと言われ、さらに今度は喜びのあまり信じられずにいるのを見て、なにか食べ物はあるかと訊かれ、焼いた魚を一切れ食べて見せたといえます。恐ろしくて信じられず、嬉しくても信じられず、理性というのは厄介なものです。御言葉を語って聴かせ、ご自身をこのように現して備えられ、さらに上から聖霊を送る約束をなされた。つくづくわたしたちの信仰は、上から支えられてあることを思います。

さて今日で、ロシアによるウクライナ侵略からちょうど2ヶ月たったこととなります。今年を受難節から復活節はコロナに加えてウクライナの問題が起き、さまざまな悲しみ、怒り、不安のなかで過ごすこととなりました。戦後の世界秩序の再編がこのまま理不尽な武力によって当たり前になってゆくのか、東アジアの今後はどうなるのか、わたしたちが享受してきた生活の基盤が失われるのではないかと、不安な思いはさまざまあろう

と思います。そしてそれは突き詰めれば個人の死と世界の破滅の問題に行きつくのでしょうか。しかし、それはいつの時代にもあり、今またそれがはっきりと目に見える形となって、わたしたちの日常を脅かし始めたということにすぎません。そうしたなか、主は復活された。死は滅ぼされたという知らせを、聖書は告げています。そういうメッセージがわたしたちのただ中に投げ込まれた。復活の主イエスはまさに、今日ただいまの不安と、恐れと、将来に対して悲観的な思いしか持ち得ないわたしたちに向けて、「あなたがたに平和があるように」と語ってくださいましたのです。「地には平和、御心に適う人にあれ」。恐れと不安と疑いの中にある弟子たちの只中に、ご自身を投げ入れ、真ん中に立たれ、主の平和を宣言されることがキリスト・イエスの存在証明です。わたしはある、という揺るがない巖のような存在、そして、このわたしが、あなたがたと共にいるのだということをお示しになった。どのような場合も、わたしたちの慰めある第一歩は、この復活の主のお言葉に聴くことから始まることを心に刻み、聖霊の助けを願いつつ、備えられてゆく道とともに歩みたく願います。

お祈りいたします。